

# 「全現役強化基金」を引き継がれる方々へ

高木晴生 第23期

7期故ジョン(全)・ジンシク先輩は、戦後社会的、経済的に極めて厳しい環境の中で千歳高校のグラウンドでラグビーのボールを追い掛けました。本名を名乗れず「玉山」姓と名乗らざるを得ない時代の中で、ラグビー部創立メンバー4期相馬雄二(故人)先輩はじめラグビー部の仲間の民族を越えた暖かい友情を生涯忘れることはありませんでした。

ある時フラフラになって練習をしている全先輩に事情を尋ねたところ、「お弁当をもって来れない。」という話を聞いた皆は、それから少しずつ自分のお弁当を分けてあげたというエピソードも伝わっております。

しかしながら、実家の生活は苦しさを極め千歳高校の夜間部への転籍を余儀なくされる事となり、あれほど頑張ってきたラグビーも志半ばにして止めざるをえませんでした。それだけに母校ラグビー部への思い入れは人一倍強く、又ラグビーで培った闘志とラガーとしての高い誇りを胸に秘めておりました。

その後、我々の想像を絶する幾多の試練を乗り越えられ兄演植氏(故人)と共にモランボングループの総師として日本でも有数の大実業家とられた後も、母校ラグビー部とラグビー部の後輩への暖かい思いやりは、年を増しても劣る事無く、むしろ益々募るばかりでした。

サクラの名を冠する競争馬を多数所有されサクラチトセオー(第112回天皇賞馬)サクラセブンオー(7期の意)等は説明することもなく千歳高校にまつわる馬名です。

昭和53年全先輩は経営者として第一戦を退かれ

るにあたり300万円をO.B会に寄付され我々後輩に現役強化の夢を託しました。昭和53年頃といえばサクラショウリがダービーを制覇した年でもあります。その頃はまだまだこのセブンスターが一個100円で買えた時代です。

その際、私には「千歳高校ラグビー部が全国大会に出場できるレベルの強いチームにするのにお金が必要であるならば、これからも幾らでも惜しみなく援助してあげるから遠慮なく行って来なさい。」「とりあえず、さらに1,000万円。」と具体的に金額まで申されました。又、ある後輩には「自分は片方の肺を取ったので走れない体になってしまった。若い人達(千歳高校の現役諸君)が走っているのを見ると何しろ応援したくなるんだ。俺に出来ることがあったら、何でも言ってきてくれ。」とも言われたそうです。

ですから、毎年、夏合宿に差し入れに行くことを殊の外、大変楽しみにされ現役の猛練習を暖かく見守って下さいました。かく言う私も一年生(昭和39年)の渋川の合宿でとても厳しい練習の後「高木、頑張ったな。」と声を掛けて頂き、思わず人目も憚らず泣いてしまったことが、つい昨日の出来事のように思い出されます。一度も口を聞いたことの無い先輩から名前を呼ばれて、優しく励まされた事が骨身に沁みて嬉しかったのです。

話を戻しますが全さんから頂いた前記の御寄付は、いつの日かから「全基金」と呼ばれるようになりました。

かといって、「全さん。」(我々は、このように呼ばせて頂いております。)は、生涯何事にも一切口を挟

む事無く「金は出すが口は出さない」という極めて模範的なO.Bであり続けました。

時には、「自分の会社にも東大卒が入社するようになった。学校の近くに部屋を借りてラグビー部員の勉強を見させようか?」とも言って下さった事もあります。

少し話が逸れましたが、「全基金」というのは既にお分かりのように、将に全さんが文字どおり、「自分の身を削って」築き上げられたご自身の財産の一部を「強い千歳高校ラグビー部復活」の一助にと、提供されたものであります。

当然の事ながら「ラグビー部の強化に繋がる事」以外には使われることがあってはいけないのは論議を待つこともない事であります。

さて、私は全さんの亡くなる直前に一通の手紙を頂きました。それには「どんなに苦しい時にあっても最後の瞬間まで希望を失わないで頑張れ!必ずや努力は報われるから。」と書かれておりました。不屈の人「全さん」ならではの真に味わいのある言葉ではないでしょうか。私には、私にだけへの言葉ではなく、むしろ現役、O.B全ての千歳ラグビークラブのメンバーに対する全さんからの熱いメッセージであるものと確信しております。

なお、全さんのご葬儀は御本人の遺言により、どなたからも一切の供物を受け取らずしかも一部の親族のみという大変ひっそりと、しめやかにとり行われました。お通夜にお伺い致しました折り、残念ながら生花は受け取って頂けませんでした。併せて持参いたしました心ばかりのラグビーボールだけのご遺族も「遺言に

は反するが、ラグビーとそして千歳のラグビー部をこよなく愛し続けた亡き父もきっと喜んでくれるでしょう。」と言われ躊躇なくお受けになり、早速ご霊前に備えて頂く事ができました。お届けした私達後輩の感謝の気持ちは、きっと天国の全さんにも届いたに違いありません。あの世で、先に故人となられた千歳のラガーとそのボールでパスをしたりキックをする全さんの勇姿が目に見えよう。全さんの事だから「天国でのメンバーが少し足りないので高木も早く来い!」と言っておられるかもしれません。

最近、休部していたラグビー部に復活の兆しがあると聞いております。「全基金」が有意義に、そして有効に使われて全さんの夢が、それは全てのO.Bの夢でもあるわけですが、一日も早く実現されますようにと祈らずにはおられません。

最後になりましたが、全さんの「高木、頼むぞ!」(現役を頼むぞ!)というたった一言に込められたあの情熱を、今や声を大にして次の言葉に置き換え、これから「全基金」を引き継がれる方々にお伝えする事により本文を締め括らせて頂きます。

「皆な頼むぞ!」(現役を頼むぞ!)

全さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます

御命日平成7年2月5日 享年63才

(本稿を執筆するにあたり8期杉本、10期小倉両先輩には色々お世話になりました。本紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。)